



TITLE:

<大會抄録>アブル・ファズル自序 を読む

AUTHOR(S):

近藤, 治

CITATION:

近藤, 治. <大會抄録>アブル・ファズル自序を読む. 東洋史研究 2003, 62(3): 507-508

ISSUE DATE:

2003-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155522>

RIGHT:

そうした方面での研究には、漢代に流行した災異説、天人相關説も大いに注目されるが、陰陽五行説の展開という文脈で考察するだけではおそらく不十分である。自然界と人間社會の間に横たわる關係性を、どのように把握し、定式化しようとしたのかを、自然學との關わりにおいて明らかにすべきであるように思われる。

物類相互の感應關係に着眼し、そこから人間の生き方、社會のあり方を考究しようとする場合には、類推という手法が活用される。それは、陰陽五行説による體系的把握とは異なる方向性があるが、漢代以降の自然探究の理念形成には、大きな作用を發揮した。そこで、『淮南子』『論衡』等に繰り廣げられた論説を具體例として、歸納方式とりわけ類推思考の特色を窺ってみた。

中國戰國時代における正統繼承の「形」

平 勢 隆 郎

正統の繼承について、私はこれまで三つの道筋を論じてきた。

一つ目は、周からの「繼承」である。これがいわゆる「繼承」になる。二つ目が「夏」王朝の復興である。夏→殷→周→夏という循環を考える。この「形」は、王朝の交替による易姓「革命」を、循環をもって説明する。三つ目が下剋上である。これは大夫という下位の者が王や諸侯にとって替わるといいうわゆる「革命」を「形」にしたものである。

一つ目が周王朝、二つ目が夏王朝に關わるが、三つ目は殷王朝

に關わる。田氏の場合、みずから殷の血を引くことを「形」にし、それで下剋上を論じた。だれでも上になれるという論理ではない。

以上の「形」を知って、それぞれの思惑を否定するのもまた「形」になる。たとえば楚は第二の夏王朝の復興と第三の下剋上をそれぞれ否定した。

戰國時代にあつて、「夏」「殷」「周」三代は歴史的存在である。それぞれが問題にされる歴史的領域があり、三つの筋道で正統繼承を語ることは、その歴史的領域の支配の正當性を述べることも關わつた。漢代には、それらの歴史的領域の違いをあいまいにし、各國の主張を混交した。そのため後代の注釋から、戰國時代の領域支配の正當主張をくみとりにくい狀況ができてゐる。

アブル・ファズル自序を読む

近 藤 治

アクバルより八年と三カ月後輩であつたアブル・ファズル（一五五——一六〇二）は、政治顧問の重責を果たすとともに、『アクバル・ナーマ』『アクバル會典』の二大著を残しており、インド史上最大の歴史家と目してよい。彼が『アクバル會典』末尾に附した自序は、司馬遷が『史記』最後に載せた太史公自序を想起させる。司馬遷の自序は自分一家の傳記を述べるとともに、各巻の簡略な内容紹介を兼ねた目次の役割を果たしているのに對し、

アブル・ファズルの自序は、目次こそ巻頭に配しているものの、一家の傳記を述べている點では變わりがない。師であつた父シャイフ・ムバーラクは當代の傑出した學者といわれており、自序の約三分の二はこの學者の記述に充てられている。なかでも、マフデー派に好意的であつたとして正統派の嫌疑を受け、二人の息子と數カ月にわたる嚴しい逃避行を餘儀なくされたくだりは壓巻である。多感、苦悶の少年、青年期を猛烈な勉強によつて耐えた

アブル・ファズルに、この逃避行が與えた影響は決定的であつたようだ。彼が神から受けた三二種の恩寵として最後に擧げたのは、彼の著書の完成であつたが、そこで執筆の動機も明らかにしている。ライバルの歴史家バダーウーニーがアブル・ファズルに加えた批評は辛辣を極めるが、自序はこうした批判の存在を承知していたことを示す。この自序にはいろいろなドラマが隠されており、これらを讀み解いていくことは實に面白い。